慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポピュラー音楽研究入門 : 一歩手前の文献案内
Sub Title	Further readings introduction to popular music research : literature guidance of one step ahead
Author	高橋, 聡太(Takahashi, Sota)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2018
Jtitle	Booklet Vol.26, (2018.) ,p.168- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	mandala musica 8 文献案内
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000026-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポピュラー音楽研究入門
一歩手前の文献案内

高橋　聡太

本稿では、これからポピュラー音楽研究に挑む方のために、先行研究の広がりを概観できる論集や、汎用的な視座を備えた文献を紹介します。類書を網羅し、個別のテーマを深くほりさげた研究にフォーカスすることを目的とせず、書店・図書館・通販サイトなどで手にとりやすく、なおかつこれから書かれる多くの研究の最大公約数となりうる要素を重視して選書をしていることを、あらかじめご了承ください。なお、文献は各セクションを編年順でリストアップしています。

あくまで私見ですが、いわゆる「ポピュラー音楽研究」は、ポピュラー音楽を対象（object）とする研究を広く囲うにすぎないカテゴリです。法学・経済学・教育学・社会学・美学、そして音楽学などのように、接尾に「学」をもつ固有の学問領域を指す概念ではありません。たとえば、法学的な観点からジャズ・ミュージシャンとアレンジャーがそれぞれ持ちうる著作権の違いを論じたり、ハードコア・パンクスたちの普段の生活とジャンルの規範がどのように結びついているのかを探るべく社会学的な質的調査の手法を用いてフィールドワークをしたり、あるいは音楽学的な楽曲分析のマナーに則り、ミーゴスのラップやアドリブやトラックを譜面に起こしてその構造と相互作用を考察したり……などなど、一口に「ポピュラー音楽研究」といっても、各研究の中核をなす問い＝主題（subject）と方法は千差万別なのです。そのうえ、どのような音楽を「ポピュラー」とみなすのかについても議論が続いているため、対象の条件づけ自体が研究の根幹に関わるため、その身近さに反して、なかなか扱いにくい側面もあります。

ポピュラー音楽研究に取り組む順序としては、まず自身のポピュラー音楽への関心を見極めて「なぜ」ではじまるシンプルな問いを設定し、それにこたえる主張をどのような「学」に則った方法で論証するのかを練り、その上で適切な対象を選ぶ、主題先行型の立論の方がなめらかに進むでしょう。各「〇〇学」には入門書や先行研究の蓄積が豊富にあり、領域ごとの方法論の議論も活発です。ディシプリン内での評価基準も整っており、目指すべきゴールを設定しやすいはず。大学の学部生以上ならば、ご自身が所属する学部や学科の名称に

なっている学問体系の流儀を参考にしつつ、主題や方法と対象となる音楽の相性を吟味すれば、堅実に研究ができるでしょう。

……とはいえ、本稿に目を通してくださっている方のなかには、とにかく何らかの「ポピュラー」とみなせる音楽を愛好していて、とにかくそれについてなにか考えたり書いたりしてみたい……と、対象ありきでぼんやりと研究を志している状態の人も、少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。つまり、とくに疑問はないけれど、まず研究対象の候補として愛してやまない音楽があり、それをどんな方法で俎上にのせて、どんな主題を見出すのかは、見定められていません。かくいう自分も、そんな状態からポピュラー音楽の研究に取り組みました。

主題ではなく対象を先行させて立論する場合、もっとも避けるべきは、特に問いが定まらないまま、研究に着手した当初からすでに自分が見聞きしていた内容ばかりを書き散らしてしまうことです。恥ずかしながら、自分の卒論がまさにそれでした。それなりの愛着をもっているだけあって、特定の音楽に関する思い入れには、けっこうな自信があるかもしれません。しかし、残念ながら普段の音楽生活のみから得たそれだけが、学術的なオリジナリティにつながることはほとんどありません。というのも、学術研究においては先行研究が何をどこまで論じてきたのかを整理した上で、自身が新たにどんな議論するのかを明示しなければ、研究の画期性を主張できないからです。音楽的な比喩に頼るなら、研究においてはジャイアン・リサイタル型の独唱を開催するのではなく、先人たちの声と自分の声を効果的に響き合わせて受け手に届ける必要があります。

また、ポピュラー音楽を「対象」として論を組み立てる際に、お気に入りのジャンルやミュージシャンから先行研究を探そうとすると、有効な文献は十中八九見つからないでしょう。大半の音楽好きは同時代的な流行を追いかけているので、対象ありきでウェブを検索しても、世に出て日が浅いお気に入りの音楽を扱った論文や学術書があまりヒットしないのは当然です。先行研究を「ない」と断じてしまっては、ジャイアン・リサイタル化は免れず、やはり説得的な立論は期待できません。

そのため、特定のミュージシャンやジャンルに思い入れのある人ほど、いったん対象そのものとの親和性は保留にして、様々なポピュラー音楽を対象とした研究全般を読みあさり、どのような主題のもとに研究が展開されてきたのかを俯瞰してみることをおすすめします。以下に厳選したのは、様々な専門をもつ論者たちによる「ポピュラー音楽」を対象とした研究を概観できる論集と、ポピュラー音楽研究を理論的に扱う多様性を提示する概論的な著作です。これらとあわせて、日本ポピュラー音楽学会の学会誌『ポピュラー音楽研究』のバックナンバーも参照すれば、これまでの研究テーマを俯瞰できるでしょう。

東谷護編（2003）『ポピュラー音楽へのまなざし——売る・読む・楽しむ』勁草書房.
キース・ニーガス（2004）『ポピュラー音楽理論入門』（安田昌弘訳）水声社.

ジェイソン・トインビー（2004）『ポピュラー音楽をつくる――ミュージシャン・創造性・制度』（安田昌弘訳）みすず書房.
三井徹編（2005）『ポピュラー音楽とアカデミズム』音楽之友社.
東谷護編（2008）『拡散する音楽文化をどうとらえるか（双書音楽文化の現在）』勁草書房.
毛利嘉孝編（2017）『アフターミュージッキング――実践する音楽』東京藝術大学出版会.

まずはこれらを手にとってみて、自分が音楽を対象としてどのような議論をしたいのかを考えてみましょう。その上で、印象深かった論文が参照している文献をチェックし、その著者が依拠している学問体系ごとの入門書や概説書にステップアップすれば、専門性を順調に深めて、対象と主題を関連付ける立論の可能性が見えてくるはずです。

さらに、修士論文以上の研究に取り組む学生は、自身のテーマに関連する英語文献を読み込まなければなりません。ポピュラー音楽研究は国際的に日進月歩で進んでおり、英語文献は論文・学術書ともに日本語文献以上に膨大に出版されています。残念ながら、上記のトインビーとニーガス以来、主要な概説的文献ですら翻訳はほとんど進んでいないのが現状です。2002年以前に発売された洋書に関しては、ミュージックマガジン社刊の『新着洋書紹介』三井徹（2003）、また、各ジャンルの主要な成果については後述する『アメリカ音楽史 ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』大和田俊之（2011）の巻末に、それぞれリストアップされているので、そちらをご参照ください。本稿では取っ掛かりとして、様々なアプローチの成果を集めた初学者向けの読みやすいリーダーや入門書を以下にご紹介します。

Frith, S., Straw, W., & Street, J.（Eds.）.（2001）. *The Cambridge companion to pop and rock*. Cambridge University Press.
Frith, S., & Goodwin, A（Eds.）.（2006）. *On record: rock, pop and the written word*. Routledge.
Bennett, A., Shank, B., & Toynbee, J.（Eds.）.（2006）. *The popular music studies reader*. Psychology Press.
Bogdanovic, D., & Longhurst, B. J.（2014）. *Popular music and society*. Polity.
Wall, T.（2013）. *Studying popular music culture*. Sage.

ここまで紹介した本は、いずれもいきなり通読を目指そうとするのではなく、まずは目次に目を通して、気になるトピックから読み進めても問題ありません。繰り返しになりますが、まずはこれまで蓄積されてきた「ポピュラー音楽研究」のうち、どのような成果が自分の興味関心と共鳴するのかを、少しずつ探ってみてください。できれば、様々なアプローチの先行研究を読みながら、少しでも興味を惹かれた未知の音楽に耳を傾けて、ご自身の音楽観にどのようなバイアスがあるのかを把握しておくこともおすすめします。

ちょっと口をすべらせると、ポピュラー音楽研究に挑もうとするような自称「音楽好き」ほど、自分の趣味に関して「ジャンルにこだわらない」と寛容性アピールしがちです。しかし、個人的な経験上、そういった自己言及をする人の趣味の幅は、極めて狭い場合がほとんどです。具体例をあげると、おそらく日本のリスナーの大多数が愛好しているであろう「音楽」は、いわゆるJ-POPのマナーに則ったものです。それはまず何よりも日本語を用いた「歌」を中心にした様式であり、Aメロ・Bメロ・サビの三部構成で、一曲の長さが3～5分程度である、等々の共通点があります。逆に言えば、そのルールからは外れた様式、歌詞の意味が取れない日本語以外の言語で歌われ、サビに至るまでの展開が組まれておらず、一曲が数時間続くような楽曲は、ふだんJ-POPのみを「音楽」として「ジャンルにこだわりなく」愛好している人は、なかなか受け入れられないでしょう。

筆者が受け持っている大学の授業で、試みとして一曲が数秒のうちに終わるグラインドコアや、あるいはベタにジョン・ケージの〈4'33〉などを演奏してみると、ときおり「そんなのは音楽ではない」という感想が寄せられます。では、あなたが「音楽」だと信じるそれは、いったいどんな条件のもとに鳴らされているのでしょうか。あなたが愛する音楽からどんな議論が引き出せるのかを検討するためには、広大な音楽の海のなかで自分の耳に届くのはごくわずかな響きのみであることを自覚した上で、その特徴を相対的に言語化しなければなりません。そのためにも、自分が扱おうと思っている音楽に、今まで以上に注意深く耳を澄ますのと同時に、先行研究を乱読しつつ、それらが俎上に乗せてきた様々な音楽を乱聴してみると良いでしょう。幸い現在はYouTubeや各種配信サービスを使えば、安価かつ手軽に様々な音楽にアクセスできるはずです。自身の音楽観を相対化する上では、以下の著作が参考になります。

渡辺裕（1989）『聴衆の誕生――ポスト・モダン時代の音楽文化』春秋社（中央公論新社文庫版：2012年）.
増田聡（2006）『聴衆をつくる――音楽批評の解体文法』青土社.
大和田俊之（2011）『アメリカ音楽史――ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』講談社.
谷口文和，中川克志，福田裕大（2015）『音響メディア史』ナカニシヤ出版.
テリー・バロウズ（2017）『アート・オブ・サウンド――図鑑 音響技術の歴史』（坂本信訳）DU BOOKS.

『聴衆の誕生――ポスト・モダン時代の音楽文化』は、現代社会においてクラシックと称される西洋芸術音楽を題材として、音楽文化と聴取実践のゆらぎをとらえた現代の「クラシック」ともいえる名著です。西洋芸術音楽が高尚な文化とみなされるに至るプロセスを軽やかな筆致で追い、文化の位相が社会とのかかわりのどれほど動的に変化しうるのかを思い知らせてくれます。『聴衆をつくる――音楽批評の解体文法』は、音楽について論じること全般の限界と可能性を多角的に提示します。特にジャンル論の系譜をコンパクトに掌握する

小論「ジャンルの牢獄」は、自身が音楽のどのような性質にとりこになっているのかを熟考する手がかりを与えてくれます。『アメリカ音楽史 ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』は、日本のみならず、世界中の音楽に覇権的な影響を及ぼしているアメリカの音楽を、異人種へなりすます欲望を切り口として概括します。紹介される膨大な量の楽曲とともに通史的な視座を得られるだけでなく、音楽を単に特定の個人やグループの「才能」や「自己表現」の賜物とみなすような、通俗的なロマン主義を批判する好機を得られます。また、近現代の音楽文化とは不可分な録音技術についての歴史的な基礎知識も、様々な研究に援用できます。『音響メディア史』は、そのための格好の教科書です。その副読本として、図版が充実している『アート・オブ・サウンド――図鑑 音響技術の歴史』の併読もおすすめします。

さて、どれだけ文献を読みこんで準備をしても、いざ自分の研究に着手すると、音楽をより深く知り、ことばを紡ぐことの困難に、あらためて直面するはずです。ひょっとしたら、ポピュラー音楽についての知的探求は、「〇〇学」の習得以上に困難かもしれません。というのも、その知の源泉は専門家による論文にあるのではなく、まず何よりも様々に媒介される音楽そのものにあるからです。たとえば、ある楽曲やミュージシャンについて考えるにしても、配信サービスや音盤を介して聴き込んだり、YouTube やテレビで映像を見たり、コンサートに足を運んで演奏を体験したり、自分で楽器を演奏してカバーしてみたり、ミュージシャン本人のインタビューを読んだり、関連する他の音楽をチェックしたり、ネット上で他者の感想を確認したり、場合によっては自分で当人に取材をしてみたり……など、その方法は様々です。音楽ファンはこうした複雑な文化実践を日頃からこなしているのですが、学術論文に組み込む以上は、今まで「なんとなく」見聞きしてきたことを、第三者が検証できるように確かな典拠に立脚して明示しながら記述しなければなりません。そのための資料収集、アーカイヴ構築、フィールドワークなどには、それなりの費用と手間と時間、そして何よりも尽きせぬ熱意が必要となることを覚悟してください。

しかも、考察の対象となるのは楽曲やミュージシャンだけではありません。上述した各媒体やファンの実践も日々刻々と変化しており、ポピュラー音楽研究はそれらの動態を問い続けてきました。真摯に研究を進めれば、必ずや自分と音楽との関係を、単なる好悪を超えた次元で見つめ直せるでしょう。そうした研究を通じた自己変容のプロセス自体を、音楽と同じぐらい楽しめるよう願っています。

（たかはし　そうた・福岡女学院大学講師／メディア文化論）